

## 「地元」をいかす小地形の読図（天竜川の河岸段丘を例に）

長野県飯田高等学校 角田新一

### 1. はじめに

2009年9月実施の第1回ベネッセ・駿台マーク模試でのこと。私は試験監督に当たっていて、地歴科目の問題冊子を配布後、しばらく経った頃のことである。地理を選択していると思われる生徒が、（模試の最中なので大きな声を出すわけにはいかないから、でも）声にならない声（低音で「うお〜っ）」をあげている場面に遭遇した。理由は図1・図2にある。

地形図の読みとり問題で飯田市街地（図1）とその近郊（図2）が出題されていたのだ。前者の中には本校もしっかりと載っており、前者の問題は地元でいう「丘の上」市街地の読みとり正誤問題、後者は近郊の段丘断面図を選択する問題であった。模試後の授業で「あの地図の中に自宅が載っていた人はいますか？」と聞いてみると、けっこう手が挙がった。前者の全国正解率は75%、後者は52.9%だったが本校では幸いにも、それより高い正解率であった。

模試でもこのような僥倖に恵まれることがあるのだから、いざ本番のセンター試験で「地元」が出題されたら、どのような結果になるのだろうかという関心が生じてきてもおかしくはない。その答が本誌2009年度2学期号の大嶋誠氏「大学入試センター試験 地理Bの問題からみえること」で報告されている。本県も2004年度に松本盆地の地形図問題（梓川流域）が出題されており、その大問における有利性は明らかに出ていて、県順位は4位であったと記されている。2007年度には青森県八戸市が出題された。青森県の地方新聞、東奥日報のWeb東奥ニュースの2007年1月26日版では「全国との差縮まる／センター試験」の見出しで「八戸市の気候や産業を題材にした出題があった地理の本県平均点は各予備校のデータで（他科目が平均を下回っている中であって）全国平均を1.2～2.5点の幅で上回った」と記している。

大嶋氏も述べているとおり「結果的に地域による有利性を享受できるのはごく一部の生徒なのであまり気にすることはない」のかもしれない。ただ、出題者に配慮が求められるとしたら、都道府県のレベルをこえた異なる



図1



図2

環境での比較地誌的なデータ分析から、正解に至る思考を問う問題の作成である。

## 2. 学習指導要領では

平成21年3月告示の学習指導要領の地理分野では、従来からいわれ続けてきた「地域調査のススメ」ともいうべき文言が散見される。「直接的に調査できる地域を地図を活用して多面的・多角的に調査し…」「…学校所在地の事情等を考慮し、地域調査を実施し…」等々。我々はじゅうぶんわかっているけれど「でも、時間がない」というのが率直な感想であろう。では、どうするか。先述の模試がヒントになる。学校周辺～生徒の通学圏の「使える地域」を例にとって読図をしてみてもはどうだろうか。

## 3. 河岸段丘・定番の学習手順

本誌の2007年度6月号付録（地形学習シート）で松宮正樹氏が群馬県沼田市の河岸段丘を教材として扱っている（『新詳高等地図 初訂版』p.106でも同じ地点を掲載）。そこでの河岸段丘の読図手順は定番といってよい。

- ①段丘崖の発見（道路の形状や等高線から）
- ②段丘崖の連続性を確認（崖を着色）
- ③等高線を追う（種類と間隔）
- ④段丘面とその土地利用を確認（色分けして着色）
- ⑤断面図の作成（形状を確認）

天竜川沿いに位置する本校で河岸段丘を扱う場合、あえて沼田市を用いることはしていない。生徒が生活感覚として体験しているアドバンテージがあるのだから、それを有効活用したいものである。

## 4. 河岸段丘・「地元」をいかした例

『新詳地理B 初訂版』p.18～20の「河川がつくる小地形」で河岸段丘を扱う際、そこには長野県駒ヶ根市の天竜川と太田切川の合流地点の写真が掲載されている（図3）。



図3 『新詳地理B 初訂版』p.18

また、『新詳地理資料 COMPLETE 2011』（以下、資料集）p.10では河川の営力が、扇状地や河岸段丘というかたちで典型的に現れている地域として中央高地を鳥瞰的にみた地図が載っている。

次に図3とよく似た図4をみてみよう。

図4

これは飯田市近郊の航空写真である。長野県企画課のホームページで「日本一(?)の河岸段丘の景観」として紹介されているところであると生徒に伝え、ここから何十人も本校へ通学しているとも伝える。勘のいい生徒はこのへんでわかるのだが、まだわからない生徒へ次のヒントが図5である。

図5

「これはある市町村のシンボルマークで、ひらがなのある文字を図案化して、左側は段丘と山、右側は天竜川に沿った平野を表している」と伝えれば、「と」から始まる飯田市近郊の「豊丘村」にたどり着く。

本校は段丘上に位置しているため、自転車通学の生徒は下の段から自転車を手押ししながら登ってくる（中には保護者の軽トラックに自転車を乗せて登校し、下校時はただ下るだけで帰宅できる生徒もいる）。この立地ゆえ河岸段丘については実体験として、段丘面・段丘崖の感覚は理解していると思われる（中には登下校時ともに

保護者の車で送迎という例もあって、自宅と学校が点と点でしか繋がっていない生徒もいる。そんな生徒も、4月の体育の授業で近くの神社の300段石段—これが段丘崖—がランニングコースとなっているので否応なく段丘崖を体験できる)。

このように直接目にしたり、通ったりすることの多い段丘であるが、その成因について飯田周辺の「タネあかし」をしてオチをつくっておきたい。

河岸段丘は河川の両側にできて、段丘面の高さが両岸ともほぼ同じレベルになる(資料集 p.11 ⑤河川流域の地形変化)。しかし本校が位置する場所(高松台)から北に延びる段丘崖とと思っている部分は、実は活断層によるものなのだという(松島信幸氏)。天竜川を挟んで竜東地区(左岸)と竜西地区(右岸)の段丘の段数や高さを比べ、地層に含まれる火山灰の位置をみると、実は合わない。本校付近から松川町までの約14kmにわたる断層は、見晴山断層と名付けられ、生徒の通学路となっている通称御殿坂・竜坂は、この断層崖なのである。天竜川左岸にあたる豊丘村は「日本一(?)の河岸段丘」で、右岸の本校付近は断層運動と天竜川の侵食によるものであると対比して、段丘地形を説明する。

河川の営力は侵食力・運搬力のバランスによってさまざまな地形を形成する。上流域に住む長野県民は、扇状地や河岸段丘が生活の舞台であり、フィールドそのものであるため、普段からそれらを意識している人はそれほど多くはないと思われる。しかし、全国的にみると地理の教科書的内容を満たす教材が地元にある地域は「恵まれている」のである。

山地から河口まで河川の営力をまとめた図6(資料集 p.10 ②)は河川の一生ともいべきものである。

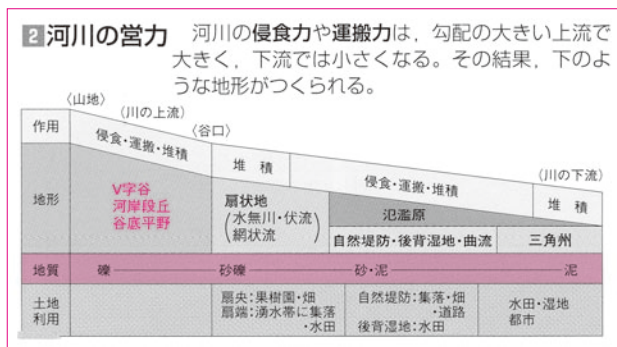


図6 『新詳地理資料 COMPLETE 2011』 p.10

この図はどの辺りにどのような地形がみられるのかをイメージしやすい。「地元」の河岸段丘のみが単独で存在するのではない。より上流域にみられるV字谷から谷

底平野へ、谷口での堆積作用による扇状地を経て、より下流域では氾濫原から河口の三角州へ至る一貫した流れが地質(礫→砂礫→砂・泥→泥)の変化と対応しながらスッキリ表現されているので、まとめとして活用している。

本校の校歌にも歌われている「天竜川は逶迤として我が伊那郡の血を成せり」は、そのまま授業では使えないけれど、比喩として何を表現しているのか—は見えそうである。

## 5. おわりに

以下2点を指摘しておきたい。

1点目。「授業で習ったのに、模試や本番のセンター試験で点がとれない。」と嘆く生徒がいる。私の個人的な感覚では、そのような生徒には共通の傾向があるように思う。真面目でかたくて、応用がきかない。地歴科目は暗記科目だと思い込んでいる—といったイメージだろうか。「授業と入試問題は別モノ感覚」を払拭するために、私は授業中やったところをその授業時間内で同じ出題分野のセンター試験問題にチャレンジさせている。そして場数を踏ませること(問題数をこなす)。データベースセンター Ten<sup>®</sup>(株式会社 ジェイシー教育研究所)を活用すれば、問題の準備にも時間はかからない。

2点目。「はじめに」でふれた模試での読図について、問われているのは特別な内容ではない。基本的な読図スキルをもってすれば正答にたどりつける問題であった。たまたま「地元」が出題されたのだが、地形図の読図は日本のどこの高等学校所在地であれ、基本は学べるはずである。また自治体のマーク(市町村章)には郷土の特徴をシンボライズしたものも多く、そこに地理ネタが存在している例も多い。盲点が校歌である。高校入学早々(応援練習と称して)校歌指導があり、そこで覚えさせられる校歌にも、実は地理ネタがちりばめられている例は多い。「地元」であれば、いや「地元」であるからこそ、それまで気づかなかったことを地形図の読図で知ることができる、そのことが喜びとして享受できるのではないだろうか。

### 参考文献

- ・信濃毎日新聞編集局編『信州の活断層を歩く』1997 信濃毎日新聞出版局

### 写真

- ・長野県企画課HP 長野県魅力発信ブログ(図4)
- ・豊丘村(図5)